

## アーノルド・トインビー研究の歩み

藤 井 透

### 〔抄 録〕

本稿は、19 世紀後半のイギリスの経済学者であるアーノルド・トインビー (1852～1883) に関する、従来の諸外国の研究をサーベして、次のようなことを論じた。トインビーに関する研究は、その死から両大戦間期まで、第二次大戦後から 1970 年代まで、1980 年代、そして、その後から現代までと、おおまかに四つの時期に分けることができる。そして、本稿は、それぞれの時期を、トインビー「神話」の誕生、「神話」から研究へ、研究の深化と発展、あたらしい「神話」か？と特徴づけた。結論として、トインビーに関するもっとも豊かな研究成果が現れたのが 1980 年代で、それを部分的に受け入れて、トインビー個人ではなく、かれの『産業革命』を現代イギリス研究にとって重要なテキストであるとみなしているのが、今日の研究の特徴だとした。

キーワード：アーノルド・トインビー、歴史学派経済学、産業革命、オックスフォード大学

### はじめに

アーノルド・トインビーは、30 歳の若さで亡くなった、19 世紀後半のイギリスの経済学者である。トインビーの名は、亡くなった 1883 年の翌年に公刊された、『18 世紀イングランドの産業革命についての講義』(以下、『産業革命』と略記)によって、「産業革命」概念をアカデミックな世界に広げた経済史家として、わが国でも、つとにしられている<sup>(1)</sup>。

近年、日本の経済学の分野で、トインビーを含む、イギリス歴史学派経済学に関する著作の刊行が相次いでいる<sup>(2)</sup>。わが国では、19 世紀末の A. マーシャルを始祖とするケンブリッジ学派に関する研究蓄積が積み重ねられてきた一方、同時代に端を発する歴史学派経済学にはこれまでわずかな関心しか向けられてこなかった<sup>(3)</sup>。このような研究動向のなかにあって、近年の歴史学派経済学に関する著作の刊行は、量的には決して多くはないものの、やはり、特筆すべきことであると思われる。

本稿は、アーノルド・トインビーに焦点をあて、トインビーおよびかれの活動に関する諸外国の研究の歩みを振りかえることにする。この作業をおこなうことによって、トインビーおよび歴史学派経済学に関して、これから探求すべき課題と論点を明かにすることができるのではないと思われるからである。基本的に、諸外国の研究に限定することの他に、三つの限定を設けたので、これらの限定の意味を述べることから、本稿をはじめてみたい。

わが国のトインビー研究が、多かれ少なかれ、イギリスをはじめとした外国での研究の影響を受けていることは言うまでもなからう。しかし、本稿が基本的に、諸外国の研究に限定する直接的な理由は、のちにみる A. カディシュのように、一次資料に基づいて、トインビーの理論や思想を再構成した日本語文献が、今のところ、皆無であるからである。

第二の限定として、本稿は、「産業革命」に関連した経済史研究には直接、言及することはしない点を挙げてみたい。それは、このテーマに関する膨大な研究に、わたし自身が独自の評価を与えることが困難であるからである<sup>(4)</sup>。ただし、当然ではあるが、本稿の論点に関連して、トインビーの「産業革命」研究に、以下、必要に応じて、言及することにしよう。

第三の限定として、本稿は、著作を中心に、トインビーに関する研究の歩みを概観し、個々の論文に関しては限定的に扱うことにする。興味深い論文がないわけではないが、一般に、著作という形になった研究が研究史において大きなインパクトを与えてきたと考えられるからである。

最後に、のちに論じるトインビーの理論や思想に対して、わたし自身の評価を述べることは控えるが、かれの年金構想にのみ立ち入った紹介と評価を行ってみたい。それは、近年のわが国の研究のなかに、トインビーの年金構想の先駆性を指摘する研究が散見されるからである<sup>(5)</sup>。

以下、これら四つの限定に基づいて、「産業革命」研究にとどまらないトインビーの活動およびかれの思想を扱った従来の諸外国の研究を概観して、その特徴と変遷をおおまかにクロノロジカルに論じて、うへの課題を果たしてみたい。

第一節は、「トインビー「神話」の誕生」と題して、トインビーの死からおよそ両大戦間期までの研究を取り上げる。第二節は、「「神話」から研究へ」と題して、第二次大戦後から1970年代までの研究を論じる。そして、第三節は、「研究の深化と発展」と題して、トインビー研究でもっとも豊かな成果を生み出した1980年代の研究について論じてみたい。最後に、その後から最近までの研究に言及し、これまでの諸外国でのトインビー研究の特徴と到達点をたしかめてみたい。これが果たされれば、今後のトインビーおよび歴史学派経済学研究に求められる課題と論点も明確にすることができよう。

なお、以下における文献の選択の際には、可能な限り、代表的な文献を取り上げたが、重要な研究の思わぬ遺漏があるかもしれないことを、あらかじめお断りしたい。

## 第一節 トインビー「神話」の誕生

「単に、金持ちだけではなく、われわれ中産階級も、みなさんを無視してきました。公正の代わりに慈善を、共感の代わりに、厳しくかつ、非現実的な助言を、みなさんに与えてきました。しかし、われわれは変わりつつあると思います。…もし、みなさんが、われわれを許してくれるなら、いいえ、みなさんが許してくれようとくれまいと、われわれは、みなさんに仕え、われわれの生活をみなさんに捧げます。これ以上のことは、できません」<sup>(6)</sup>。これは、1883年1月18日にロンドンで、トインビーが労働者向けにおこなった2回連続講演の最終盤の一節である。そして、これから、わずか2カ月も経たない、3月9日にトインビーは、亡くなった。

うえの一節は、H. ジョージ批判を目的とした講演それ自体というより、1926年に公刊された、B. ウェップの最初の自伝である『わたしの徒弟時代』で、当時の中産階級における「罪の意識」の典型的な表白として、引用され、彼女自身もつよく共感した一節として知られてきたといえよう<sup>(7)</sup>。このような引用がなされていたことに、トインビーに関する「神話」が第一次大戦後も息づいていた証左をみることができる。

以下では、トインビーの死から両大戦間期までのかれに関する言説をまとめ、トインビー「神話」の誕生を論じてみよう。「神話」の誕生には、のちに取り上げる1894年のA. ミルナーの言説が決定的な役割を果たしたと思われるが、それ以前にも、注目すべき複数の言説があった。

はじめに取り上げられるべきなのは、1884年に『産業革命』が刊行された際に寄せられた、B. ジャウエットの回想文である。ジャウエットは、当時、オックスフォードのベイリオル・カレッジの校長であり、トインビーがオックスフォードと深い関係をもつきっかけを作った人物であった<sup>(8)</sup>。

ここで、ジャウエットは、30歳の若さで亡くなったトインビーを惜しんで、かれがいかに、まわりの人物に愛され、かつ、将来を嘱望された人物であったかを語っていた。なぜ、まわりの人物に「かれ〔トインビーのこと〕」が大きな影響を及ぼしたのかを考えてみると、そこには、かれの気取らない誠実さという秘密があったからである。だれも、かれに虚栄とか野心の跡を見つけることができなかった<sup>(9)</sup>。

また、トインビーは「古い経済学」が「真実の半分」しかないと思い、「あたらしい経済学」を構築しなければならないと思った。それは抽象ではなく、「事実」に近づけられなければならない。たしかに、トインビーは自分の経済学を築くことはできなかった。しかし、「かれの著作を評価する際、われわれは、かれが30歳で亡くなったことを忘れるべきではない。かれの人生にあって、真に興味深く、目覚ましいことは、かれが実際に生み出したものではなく、彼自身という存在なのである」<sup>(10)</sup>。

ジャウエットの回想文は、トインビーの死からわずか1年しかたっていない状況で、彼と親しかった人物がかれを惜しんで書いた典型的な一文であった。そして、このような特徴は、オッ

クスフォード時代の友人のひとりであった、F. C. モンタギューが1889年に書いた評伝にもみることができる<sup>(11)</sup>。

モンタギューも評伝のなかで、トインビーがいかに魅力的な人物であったかを語っていた。「魅力的な風貌，才能，知識，社会的な資質は，大学で友人を獲得する以上の資質であった。そして，トインビーはほかにも多くの魅力をもっていた。かれは，言葉のすべての意味において，共感する力をもっていた」<sup>(12)</sup>。また，トインビーの経済学に関して，モンタギューは，かれの「産業革命」研究が，いかに先見的な研究であったかも述べていた。「中世的，農業国イングランドが民主的で商業的なイングランドに変わった革命の大きさを考慮すると，その歴史が今日まで，書かれぬままに残されていたことは，いくらか驚くべきことであった」<sup>(13)</sup>。

しかし，トインビーにとって，「経済学はいつも政策の一部であった」。かれが，「労働者教育運動」にも力を入れ，オックスフォードはもちろん，それ以外の地方都市やロンドンで講演を行ったのも，「資本と労働の敵対的関係を緩和すること」が目的であったのである<sup>(14)</sup>。

トインビーは労働者を含めた聴衆に対して，「賃上げが賃金労働者の文明化を引き上げる限りにおいてのみ，すべての社会の利害にとって望ましいことであることを思い出させたのである」<sup>(15)</sup>。

精粗や立場の違いはあるものの，ジャウエットおよびモンタギューの一文からは，驚くほど似た印象を受ける。すなわち，オックスフォード大学で多くの友人から愛され，社会活動にも積極的にかかわっていた，才能もあり人望もあった将来ある経済学者が，30歳の若さで早世してしまったことを惜しむ一文，と指摘できよう。わたしは，トインビーをこのような観点でのみ評価する伝記や回想が，当時や後の社会に与えたトインビー像を，トインビー「神話」と呼ぶことにしたい<sup>(16)</sup>。このような「神話」を完成したのが，次に取り上げるミルナーであった。

ミルナーは，「国教会改革」運動をはじめ，オックスフォードで生前のトインビーと深い親交があり，かれの死後，妻であったシャーロットから，かれの「産業革命」に関する講義をまとめ，書物として出版してくれるよう依頼された人物であった<sup>(17)</sup>。

1894年11月27日に，トインビー・ホールにおいて，その関係者に配られた，トインビーに対するミルナーの回想録が「神話」の誕生を決定づけたと考えられる。『産業革命』の新版に付せられたこの回想録の要点をはじめにたしかめてみたい。

ミルナーは，病弱だったトインビーの生い立ちなどを簡単に述べた後，オックスフォードでのかれの活動に言及した。ミルナーによれば，注目すべきなのは，トインビーがペイリオル・カレッジのチューターに就任した1878年10月以降の時期であった。

ミルナーによれば，「かれは，講演者，教師として，教室のみならず，カレッジでの生活の気軽な交際によって与えられたすべての場で，学生への教育に，全精力を傾けた。同時に，市民的な熱情をもって，社会的，宗教的改革という大義のために，身を投じた。かれは，救貧法の貧民救護委員，協同組合員，教会改革者であった。そして，かれは，強烈な関心と実際のな

共感をもって、友愛組合と労働組合に理解を示した。かれは、人々の生活の外面的な状態を改良する運動——よりよい住宅、オープン・スペース、無料図書館、そして当時は、公的な認知を得るために苦闘していたが、現在では、なじみになった自治体社会主義のすべての対象——にも深くかかわった。その上に、高貴な市民生活という理想によって、かれの魂の深い部分が突き動かされたことで、当時の雰囲気が充満した、社会、経済的な問題について、最初は北部の都市、それから、ロンドンで、多くの一般の聴衆のために講義をしたのである<sup>(18)</sup>。

トインビーは「普通の人間の十二人分の能力」を発揮して、これらの活動を行った。ミルナーによれば、トインビーは、ギリシア風の彫の深い容貌と相まって偶像となり、オックスフォードでは「使徒アーノルド」(Apostle Arnold)と呼ばれるようになった<sup>(19)</sup>。しかしながら、上記のような活動の結果、「極度の過労がかれに死をもたらした」。「人類への奉仕のためにすべてを捧げた人物がいたとしたら、それはトインビーであった」と述べ、ミルナーはトインビーの諸活動を絶賛して、この個所をむすんでいる<sup>(20)</sup>。

それでは、トインビーは、なぜ、このような活動に力を注いだのだろうか。「かれが労働者の物的状態の顕著な改善に熱心だったのは、それ自身が目的ではなく、より高次の生活の可能性を広げる」ためであった。そして、このような改革は、情熱だけでは達成され得ないと、トインビーは確信していた、という。必要とされているのは、「手引き」であった。かれの経済学は、その「手引き」だったのである。「宗教のために、かれは社会改革者になった。そして、社会改革のために、かれは経済学者になった」とミルナーは指摘している<sup>(21)</sup>。

ミルナーはトインビーが、経済学で、なんらかの完全な体系を構築したわけではなかったと述べた。しかし、トインビーの思索の方向は明確で、経済理論の領域では、「中道」の位置を占めていたと、いう。すなわち、トインビーは、歴史的な調査と社会学的な観察によって、科学は構築され得ると思っていたのである。かれの『産業革命』は、このようなトインビーの本質的な特徴をよく表していた。

ミルナーは、「産業革命」概念を壮大な概念であるとし、もし、トインビーが、生きて『産業革命』を完成させていたならば、偉大な書となっていたであろうに、とかれの早過ぎる死を悼んだ。たしかに、体系の論理的な解明は、トインビーの強みではなかった。しかし、かれは「過去の状態を生き生きと表現し、過去の世代の思想や目的に共感する力——すなわち、歴史的なイマジネーションをもっていた」<sup>(22)</sup>。

以上のように述べた後、ミルナーはトインビーの研究と生涯、そしてかれが社会に与えた影響に言及し、次のように講演をまとめた。ミルナーによれば、トインビーが社会政策の分野、およびその他で、かれが真剣に取り組んでやろうとしたことからみると、彼の人生は短すぎた。たしかに、トインビーを失ったことは、取り返しのつかないことであったが、世界に対する、かれの永久的な価値と重要性は間違いなく今でも存在しているのである、と<sup>(23)</sup>。

最後に、社会改革に関するトインビーの業績をミルナーがどう評価していたかを論じて、本

節をまとめてみよう。ミルナーによれば、トインビーは社会主義者ではなかったが「社会の再組織化の必要性」をつよく感じていた。かれは「民主的国家」、自治体、ボランティア組織にそれぞれの役割を期待し、社会の再組織化を構想した。かれの構想は、物的福祉だけではなく、社会の成員の道徳的発達を助けることを目的として、計画が練られたのであった。よって、その見方によれば、自己依頼を損ねたり、性格を弱める傾向のある施策は、物的福祉にも役に立たないとみなされた<sup>(24)</sup>。この社会の再組織化の例として、ミルナーはトインビーの国家老齢年金構想を挙げている。

ミルナーは死の直前に、かれの老齢年金構想を聞いたと述べた。それは、友愛組合の基金を国家の拠出によって補足する計画であり、のちのJ.チェンバレンの計画に酷似していた。トインビーの年金計画は、「労働者が真に自己の儉約と自己犠牲によって、老後に備えるときに、コミュニティが慈善ではなく権利として、その施策が適切であることを保証しなければならない」というかれの構想によって支えられていた<sup>(25)</sup>。ミルナーによれば、トインビーの老齢年金の構想は「専門家でさえ、それが一般的な議論になる、少なくとも、6～8年前に先立つ」ものであった、と<sup>(26)</sup>。

以上、ミルナーの回想録をみてきた。ジャウエット、モンタギュー、そして、トインビーの死からおよそ10年経って語られたミルナーの言説により、トインビー「神話」が誕生したといえる。そして、両大戦間期にまで視野を広げると、本節の冒頭で引用したウェブの自伝も「神話」の時代の産物だといえよう。

さきにも言及したように、トインビーという個人を語る上で、生前の友人や恩師が重要な役割を果たすことは当然のことであった。30歳という若さで死んだ友人や教え子を悼む気持ちがそこに混じることまた、自然の感情である。本節で取り上げた人物より、トインビーとの接点が薄かった、マーシャルでさえ、1887年5月に、トインビーを「中世の聖人の近代にみる理想的な見本であった」と激賞していたほどであった<sup>(27)</sup>。わたしも、「神話」を構成する事実がすべて虚偽であったと言う気は毛頭なく、ミルナーらの指摘に多くの事実が含まれていると思う。

しかしながら、故人を悼む言説が時代の文脈から切り離され、無批判にトインビーを絶賛する言説となれば、それぞれの個人的な評価が、往々にして、学問的な評価に転化してしまうといえよう。すなわち、「神話」によって、たとえばトインビーの社会の再組織化のための構想が、どのような利害を背景にもって、どのような意図で計画されたのかがまったく問われなくなるのである。

トインビーという「非の打ちどころのない」人物が語った思想や政策が、そのまま内容の吟味を受けることもなく、当時の社会においてきわめて重要な業績であったと受け入れられた時点で、それは「神話」となったといえよう。



## 第二節 「神話」から研究へ

前節でみたように、トインビーの死から両大戦間期まで、トインビー「神話」は通用していたといえる。しかしながら、第二次大戦以降、トインビーに対する評価は「神話」から研究対象へと移っていった。本節では、1970 年代までのトインビー研究を概観し、その特徴と到達点をたしかめてみたい。管見する限り、この時期、経済学史、思想史、社会史の分野で注目すべきトインビー研究の成果が現れていた。

経済学史の分野では、経済学方法論に造詣の深い、T. W. ハチスンの業績に注目すべきである。1953 年と 1978 年の著作は、それぞれ扱っている対象やパースペクティブは異なるものの、どちらもトインビーに関心を示していた<sup>(28)</sup>。ハチソンは 1953 年の著作で、1870 年代イギリスの経済学者が、市場と国家の関係に対してどのような態度を示していたかという論点に関して、「自由市場と国家活動のこの両者が、むしろより同等の関係として評価されるようになった」と論じた<sup>(29)</sup>。そして、それを示す好例として、トインビーの『産業革命』のなかの「競争はそれ自身、よいものでも悪いものでもない」という一節を引用した<sup>(30)</sup>。

「競争の悪い結果」に対して、当時の経済学者の力点が、「生産から分配へ」移ったとみたハチソンはその論拠として、ふたたび『産業革命』に依拠して「分配問題は現代における経済学の真の問題である」というトインビーの一節を引用したのである<sup>(31)</sup>。

また、ハチソンは、1870 年代以降、さかんに行われた経済学方法論争に対してもトインビーに言及し、「方法論争の主な結論は、バジヨットおよびトインビーの穏健な観点とジェボンズの排他的ではない方法と一致していた」とまとめている<sup>(32)</sup>。

このように、言及している部分は決して多くはないものの、ハチソンは、1870 年代から 80 年代にかけてのイギリス経済学の理論動向のなかで、トインビーを時代の要請に応えつつ、しかも、理論を否定する極端な歴史学派経済学者でもなかったと評価していた。

思想史の分野では、のちの研究に大きな影響を与えた 1964 年の M. リヒターの T. H. グリーン研究に注目すべきであろう。研究史上、それまで十分な光が当てられてこなかった、イギリス理想主義に焦点を当て、「グリーンの思想、環境、かれの影響」を論じたのが、リヒターであった<sup>(33)</sup>。そして、グリーンに周囲にいた重要人物のひとりとして、グリーンの子であるトインビーにも言及されていた。

リヒターによれば、トインビーはイギリス古典派経済学に反対し、その代わりに、グリーンを精神を持ち込んだ、経済史と経済理論の研究に向かった。かれは「協同組合、友愛組合、労働組合が労働者階級の生活水準を引き上げる力があることを信じていた。国家の義務は、無料の義務教育、労働時間の規制、自分たちのボランティアな努力によって、疾病と老齢にたいして保険を用意する労働者階級によってなされた拠出を、[国家が] 補足することを通して、それらの努力に援助を与えることである」と理解していた、という<sup>(34)</sup>。

リヒターによれば、このようなトインビーの政治思想は、グリーンと同じく「両義的」であった。すなわち、トインビーは「社会主義」という言葉によって、「私有財産の破壊とか、 Kommunismusを意味しておらず、全コミュニティの財がかかわっていたとき、全市民のために国家が保護することを含意していた。そして、ボランティアな活動が不可能な時に初めて、国家の活動が進められるべきであった」と理解していたのである<sup>(35)</sup>。

最後に、リヒターによるトインビーの国家年金構想の評価を参照してみよう。かれによれば、グリーンは反対であったが、トインビーは年金を提案した。トインビーは「社会保険の問題として、ひとつの解決案」を提案したのである。そして、リヒターは、トインビーの年金提案を、多くの点で、後にロイド・ジョージが採用した友愛組合との妥協を予期させるものであったと指摘していた<sup>(36)</sup>。

以上、リヒターの思想史研究をみてきた。グリーンの影響を受けたトインビーが一定の社会改革思想を有していたというリヒターの指摘は、1970年代以降、本格化するイギリス新自由主義研究の嚆矢となったとみて間違いのないと思われる。ここに、リヒターの研究の先駆性がある<sup>(37)</sup>。

最後に、社会史の研究成果から、トインビー研究を概観してみよう。本節で扱っている時期は、イギリスにおいて、社会史にマルクス主義史学の影響がみられた時期と重なる<sup>(38)</sup>。この時期の代表的なマルクス主義社会史研究として、1971年のG.ステッドマン・ジョーンズの研究が挙げられよう。かれは、1880年代ヴィクトリア期ロンドンの「危機」を、ロンドンの労働市場、臨時労働者問題から説き起こし、住宅問題と臨時労働に言及し、中産階級の側が、それらの問題にどのように対処したかを論じた<sup>(39)</sup>。

ステッドマン・ジョーンズは、著作の後半で、1880年代ロンドンの危機をより深刻で、包括的なものとみなし、このような危機に中産階級の知識人がどう対処したかを論じた。そして、そのなかで、救貧行政に深く関与していたCOS（慈善組織協会）の伝統的な方法に多くを負っているながらも、そこから離脱して独自の見地を打ち立てた重要な人物として、トインビー・ホルの初代館長となったS. A.バーネットとトインビーが取り上げられた。

ステッドマン・ジョーンズによれば、両者の問題意識は次の点で共通だった。社会主義と大きな社会変動の脅威に対して、かれらは「現行の社会システムは、一方における真の労働者階級と他方における臨時的な最下層労働者（casual residuum）の間に明確な線引きがなされない限り、ひっくり返されるのではないかと感じるようになった」<sup>(40)</sup>。

このような問題意識から、バーネットは1883年にCOS批判をおこない、のちにそこから正式に離脱したのだった。ステッドマン・ジョーンズによれば、「バーネットもトインビーもばらまき慈善と院外救済の危険について、COSの確信に十分な理解を示していた。しかし、かれらはこれらの害悪は、労働者階級の協力なしには決して緩和されないと感じていた」<sup>(41)</sup>。

バーネットの「実証的社会主義」とトインビーの社会改革思想は、先の問題意識に沿って、「品



位ある労働者階級の正統的な不平であるとかれらが思ったことに対処し、その代わり、「最下層労働者」にたいする闘いにおいて、真の労働者の支持を勝ち取ることを目指すものであった」<sup>(42)</sup>。

このような両者の考えによって、救貧法の管理に、労働者階級の参加を可能にする必要性が強調された、という。この点の根拠として、ステッドマン・ジョーンズは、次のようなトインビーの提案を引用していた。「わたしは、救貧法の下で、院外救済を廃止したい。なぜなら、院外救済は賃金を押し下げ、その受領者の墮落をうながし、自己依頼の精神を減じるからである。わたしは、労働者階級自身が、救貧法の貧民救護委員として就任することで、このことを実行に移したい」と<sup>(43)</sup>。

ステッドマン・ジョーンズによれば、さらに、「バーネットが 60 歳まで、ワークハウスの世話にならずにやっていけた人々のための無拠出年金を提唱し、他方、トインビーが公共住宅の補助を示唆したのも、この精神によるものだった」と指摘している<sup>(44)</sup>。

以上みたように、1971 年の著作で、ステッドマン・ジョーンズは、1880 年代のロンドンの危機に対して、中産階級がどのような対処をしたかという文脈のなかで、バーネットとともにトインビーを取り上げ、かれらが体制維持のために、労働者階級に対して「階級分断」的施策を提案していたと論じていた。

第一節でみたように、最晩年の H. ジョージ批判を目的としたトインビーの連続講義には、まさに、“良心に目覚めた”中産階級の視点がよく表れていた。その限りで、ステッドマン・ジョーンズの分析には説得力があるといえよう。

以上、第二次大戦後、とくに、1970 年代までのトインビー研究の特徴と到達点をみてきた。結論的に述べれば、第一節でみたような、トインビーを神格化する研究はこの時点で、ほぼ消えたともて間違いないと指摘できる。これには、マルクス主義の影響を除けば、次の要因が考慮されるべきであろう。すなわち、トインビーを直接知っていた人物もいなくなったことに加えて、19 世紀末にはまだ未分離だった経済学史や経済史が独立した学問分野として確立されたことで、それぞれがトインビーおよびかれの主張を、1880 年代イギリスの経済や経済学の発展という文脈のなかで、位置づけようとする研究がふえてきたからだといえる。

### 第三節 研究の深化と発展

トインビーの死およびトインビー・ホールの創設からおよそ 1 世紀経った、1980 年代は、トインビー研究という視点からみて、もっとも実り多かった 10 年といえよう。「神話」の時代の伝記を除いて、書かれてこなかったトインビーの学術的な伝記が、はじめて 1986 年に、カディシュによって公刊されたからである<sup>(45)</sup>。

そして、1980 年代には、本稿の最後に述べる現代のトインビー研究の動向を示唆するふた

つの研究も公表されていた。1981年のM. J. ウィーナーのイギリス産業精神に関する文化史的研究と1987年のG.M. クートによるイギリス歴史学派経済学に関する本格的なモノグラフがそれである<sup>(46)</sup>。以下では、カディシュの研究に関して立ち入った紹介と分析をする必要があるもので、ウィーナーとクートの研究を吟味することから本節をはじめることしよう。

ウィーナーの研究は「イギリス衰退論」の歴史的起源を探る研究であり、その関心から、1880年代を境として、産業主義と産業精神に対する見直し作業が始まったとみなした。そして、その先陣を切った研究として、トインビーの『産業革命』に焦点が当てられた。ウィーナーによれば、トインビーはそれまでの「政治経済学」が物的生産の増加を第一の目標とし、すべての要求に優先させたとみなした。しかし、「今や、生産への執念を捨てて、分配と生活の質とに注意を集中すべき時が来た」とトインビーは論じた。そして、工業化に対して疑問を呈したトインビーの視点は、ハモンド夫妻やG. M. トレヴェリアンの研究にまで、連綿と受け継がれた、という<sup>(47)</sup>。

ウィーナーの研究は、トインビー研究という視点からは、とくに目新しい指摘はなかったものの、トインビーおよび『産業革命』を現代イギリスに関する「衰退論」の出発点であったとみなしたところは注目すべき点であったといえる。なぜなら、このような関心が、21世紀のトインビー研究に、受け継がれたと考えられるからである。この点の詳細は、最後にあらためて言及したい。

一方、クートの著作は、歴史学派経済学者の特徴として、「政治的な提案とアカデミックな活動に矛盾を感じていなかった」という点を指摘し、かれらは、社会主義と規制のない資本主義との間の中道を求めた、と論じた<sup>(48)</sup>。

そして、トインビーに焦点を当てた個所で、クートは、トインビーの学問上の目的は次の三つであったと指摘した。第一に、イギリスの経済史に、工業化の時期を提供すること、第二に、古典派経済学を説明し、歴史的に批判すること、最後に、社会改革のプログラムを示唆すること、この三つであった<sup>(49)</sup>。

まず、経済史家として、トインビーは産業革命の社会的結果について、深刻で悲観的な解釈を与えた、という。クートによれば、トインビーはK. マルクスのように、明確な疎外の歴史家だった。次に、経済学者としてみると、トインビーは、演繹的な経済学と帰納的な経済学の間に基本的な対立はないとみなしていた論者だった。問題は、古典派経済学が応用された大衆的な経済理論にあった。それらは経済の状況が変化しているにもかかわらず、社会改革に反対するスローガンとして、リカード経済学を採用していたからである。

実際の経済学は歴史的でなければならぬとみていたトインビーにとって、D. リカードの経済学は、その抽象的な体系が、決して実在しない「経済人」を前提にしていた点に間違いの根源があった。そこから、リカードの経済学は、イギリス労働者階級の状態を悪化させ、その状態の改善の障害となっていたとみなされた。そこで、トインビーは、リカードの影響を相

殺するために、R. マルサスと J. S. ミルを支持したのである。

トインビーにとって、リカードの経済学に影響を受けた社会主義者による暴力的な社会変革を防ぐために、とくに労働貴族層に訴える政策が重要であった。一言で言うと、労働貴族層は、「賃金基金説」という古典派経済学の宿命論的仮説から解放されるのである。よって、トインビーの社会改革は、かれらを念頭にした、老齡年金、職人住宅の提供、労働条件の規制に限られていた<sup>(50)</sup>、という。

ただし、トインビーの社会改革プログラムの核心は、国家による政策というより、むしろ、労働貴族層のボランタリーな共同行動にあった。トインビーは、友愛組合、協同組合、慈善組織に信頼を置き、そして、それらに比べると、やや弱くなるが、労働組合にも一定の理解を示していた。以上の点をまとめると、トインビーの「急進的社会主義は、パターンナリストティックで、T. H. グリーンの積極的自由主義のトーリー版であった」といえよう<sup>(51)</sup>。

クートによれば、トインビーによる産業革命の諸結果に関する破局的な解釈は、経済史における歴史研究の伝統の土台を与えた、独創的な貢献であった。そのインパクトは今日においても、依然として存在しているのである<sup>(52)</sup>。

以上のように、クートのトインビー評価は、トインビーの経済学、思想、政策提言について、それまでの欧米のトインビー研究を手際よく整理した評価だといえる。ところが、クートはその 1 年前に刊行された、カディシュの伝記研究を参照する時間的余裕がなかったと考えられる。そのために、次に吟味するカディシュの研究とクートの研究には、決して小さくない評価の違いがあったのである。

カディシュは 1980 年代に、トインビー研究を含めたオックスフォード経済学や経済史の成立に関する単著を、3 冊も立て続けに公表した気鋭のイスラエルの経済思想家であった。カディシュによる、はじめてのトインビーの伝記研究、『使徒アーノルド』に関して、限られた紙数で、全容を紹介しコメントを加えるのは不可能であるので、以下、『産業革命』をはじめとしたトインビーの理論と思想を中心に、カディシュの評価をみることにしたい<sup>(53)</sup>。

カディシュの研究がどのような点で独創性があるかを明かにするためにも、それまでの『産業革命』に対する常識的な理解を確認しておくことがまず必要であろう。従来、『産業革命』の成り立ちに関しては、妻のシャーロッテによる同著の「序文」に基づいて、次のように理解されてきた。

トインビーは生前、出版のための原稿を全く用意してはならず、妻が著作を出版しようと計画したこと、そして『産業革命』は、トインビーがオックスフォードで、1881 年 10 月から翌年の 5 月まで講義していた内容を、教え子である W. J. アシュリーと B. キングが書きとめていたノートを基に、再構成したもので、全体は、妻から依頼されたミルナーによって校訂され 1884 年 5 月に出版された、と。一言でいえば、『産業革命』はトインビーが自らの手で執筆した書物ではなかったのである<sup>(54)</sup>。

このような点が、常識であったにもかかわらず、従来のほとんどの経済史研究は、『産業革命』がトインビーによって、一貫した論理で執筆されていたかのような扱いをしてきた。すなわち、トインビーは、産業革命によって、工業化以前の家内工業から工場制度に生産のあり方が激変し、それに伴い、生産における人間的紐帯が金銭関係によって置き換えられ、労働者の貧困が増大したとする、経済史研究で言うところの「断絶」および「悲観」論者であるとみなされてきた<sup>(55)</sup>。

ところが、わたしがみる限り、このような評価に対して、ち密なテキスト・クリティークによって、カディシュは以下の6点で異議申し立てをしていたのである。第一の点として、『産業革命』の章ごとを子細に検討することで、同著でのトインビーの主張が自家撞着に陥ったり、脱線している事実を指摘していたことが挙げられる。「トインビーは方法的に必ずしも一貫していなかった」<sup>(56)</sup>。マルサスの扱いをその事例として参照してみよう。

トインビーは第9章「貧困の増大」を、「マルサスは、かれの著書はゴドウィンの研究によって暗示を与えられたものであると言っているが、それは正しくは、マルサスがかれの周囲でみた貧困の急速な増大に教えられたものであった」という一節から始めている。ところが、続く第10章「マルサスと人口法則」では、冒頭で「マルサスが著作を書いたときに、…かれは救貧法についてではなく、ゴドウィンについて考えていたのである」と述べていたのである<sup>(57)</sup>。

それでは、トインビーはなぜ、同じ著書のなかで、あきらかに矛盾する評価を与えていたのだろうか。カディシュによれば、「トインビーの独特な知的発達とイデオロギー的な肩入れの強さが一緒になって、アカデミックな活動に必要とされる、ひたむきさを妨げていたように思われる」<sup>(58)</sup>。

首尾一貫しない主張を招いた原因として、カディシュは、トインビーの学問的方法の特性を弱点として挙げていた。これが二点目である。「かれ〔トインビーのこと〕の学問的業績は、発展しつつある“信条”（gospel）を不可欠な一部とするものから成っていた。進歩とその道徳的結果に対する信頼は揺らぎがなかったけれども、…かれは絶えず、最新の問題を解釈し、扱う必要を感じていた」<sup>(59)</sup>。これは厄介なことだった。トインビーの信条にしたがって、発展の解釈が困難な問題であればあるほど、その問題を、解決しないままに放置しておくことができなかったからである。

その結果は、「慢性的な脱線となった」。研究課題が始まっては、中断し、議論が断念されるか、あるいは、矛盾したものとなった。「以前、表明されていた立場が、自分の信条と矛盾していると思われるようになった時には、都合良く、以前の見解が忘れ去られた」のである<sup>(60)</sup>。

第三と第四点目は、従来の『産業革命』の解釈に対して、直接的に異議申し立てをしている点である。まず、カディシュは、「産業革命」という用語によって、トインビーが独自に与えた含意をきわめて明瞭に説明した。これが三点目である。

「産業革命」という用語が、トインビー以前に使われていたことも周知のことであろう。と

りわけ、F. エンゲルスが「産業革命」によって、それを技術変化にのみ適用しなかったこともよく知られていた。同時代人の「産業革命」の用法に対して、トインビーが「幅広い角度の社会主義者の概念を、進歩という自由主義的な概念に翻案することで、社会主義的な幅広いパースペクティブを失うことなしに、工業化の時期の自由主義的歴史研究を可能にしたこと」こそ、かれの革新的な「産業革命」の用法といえる<sup>(61)</sup>。

換言すれば、トインビーによれば、「技術的变化と工業化は、大陸の社会主義者によって明確に期待されていた大きな政治的変革の土台を用意するものではなかった。権力と富の分配における変化が、かれが言う、「産業革命」の不可欠の一部として生じたのだ。革命とは進行中 (underway) のことを意味し、それがイギリスの典型的な革命であった。すなわち、突然で、暴力的というよりむしろ、漸進的で、総体的に平和的なものである」<sup>(62)</sup>。

エンゲルスやマルクスの用法とは異なり、トインビーは、同じ「産業革命」という用語によって、漸進的で平和的な社会の進路を含意していた。よって、「産業革命」とは「断絶」を意味するものではなく、「工業化とその結果である、社会的経済的变化は、「アクションとリアクション」という用語で語られ得るものであった」<sup>(63)</sup>。

第四点目は、工業化の結果に関するトインビーの見通しに関する論点である。さきにも簡単にふれたが、従来、トインビーは、「悲観論者」の代表的なひとりとみなされてきた。しかしながら、J. S. ミルの『経済学原理』を強く意識した、最終章「労働者階級の将来」でトインビーは、「工業化の結果にたいして当初、採用していた破局的な見方を捨て、それに代わって、発展のより直線的なビジョンに置き換えた」のである<sup>(64)</sup>。

それは、かれが「工業化は、また、その悲惨な結果を是正する手段を提供する」とみなしたからである。さきの論点でふれた「アクションとリアクション」を想起されたい。つまり、長期的には、「工業化が労働者階級の発展を可能にする」ということが言えるのである。

トインビーは、工業化によって、労働者は工業化以前の静態的な社会の制限から解放され、時間とともに、それを通して、富の正当な分け前を保証させるために、産業的に作りだされた富の分配を変える前例のない力を獲得するとみなしていた。そのプロセスは、決して、直線的ではないが、友愛組合、協同組合、労働組合などによる労働者の共同行動によって、それが可能となる。このように、カディシュによれば、「産業革命によってもたらされた悲惨な状態は、労働者階級に進歩の道を強制的に歩ませる目的に役立つ」のである<sup>(65)</sup>。

第5点目として、カディシュが、トインビーの歴史の方法を明確にした点を挙げることができよう。カディシュによれば、トインビーは、経済関係が変化するにつれて、それらを表現する経済法則も変化するとみなしていた。しかし、「経済変化それ自身は、社会的、政治的变化のよりおきなプロセスの一部に過ぎず、そのパターンは進歩の一般法則として確かめられ、公式化され得る」。したがって、トインビーは、進歩の一般法則こそ、ときどきの経済法則の意義を凌駕するイギリス史の道筋をさし示していると理解したのである。これは、トインビー



が、T. マコーレーのイギリス史の一般的道筋を受け入れたことを意味する<sup>(66)</sup>。

さらに、トインビーは、マコーレーの見方を前提としながらも、当時、徐々に、一般的になっていた、人間活動のすべてを取り囲む科学というコント的な理想に、イギリスの歴史叙述を、より近づける一步を与えた、という。カディシュによれば、歴史と「あたらしい」経済学という、この明かに概念的、方法的に簡潔な統合を試みることによって、イギリス史の著作にトインビーは大きな影響を与えたのである。以上のようにみてくると、トインビーこそは、「あたらしい」経済学を歴史と統合し、それらを「新自由主義の大きなイデオロギー的フレームワークに収めた」人物であったことが明白であろう<sup>(67)</sup>。

最後に、カディシュが、『産業革命』の編集作業におけるミルナーの役割を明確化した点を挙げてみたい。トインビーの妻から『産業革命』の編集を要請されたミルナーは、処理を任せられたノートに基づいて、一定の事実の追加と変更をおこなった。その際、かれはトインビーの急進主義に当惑したという。ミルナーは心からトインビーを尊敬していたが、政治的信条に関しては、必ずしも同じではなかったからである。その結果、ミルナーの後のリベラル・ユニオニストおよび帝国主義的視点からは、相いれないトインビーの主張に対しては、次のような処理を行った。「アイルランド地主にたいするトインビーの痛烈な批判」は削除し、「貴族院の廃止を求めるかれの要求も、改革の提案という形に変更して水で割ることを選択したのだ」<sup>(68)</sup>。

従来のトインビー研究のなかには、B. センメルのように、トインビーを帝国主義者だったとみなす研究もないではなかった<sup>(69)</sup>。しかしながら、そのような評価は、ミルナーが自分の主張に沿うように、トインビーの主張を改竄した結果、そのテキストをトインビーの基本的な見地の表明だと誤って下した評価だった可能性が生じたといえよう。

以上、6点にしばって、従来のトインビー研究に対するカディシュの異議申し立てをみてきた。これによって、かれの著作が、『使徒 アーノルド』というタイトルの響きからは、想像もつかないような、『産業革命』などへのきびしいテキスト・クリティークを経て執筆された伝記研究であったことが明らかであろう。

個々の論点から浮かび上がってきたのは、産業革命によってイギリス史が「断絶」され、その結果、労働者の生活水準が悪化したとする「悲観的」な見方を示したのが『産業革命』だったという従来の通説を、カディシュが真っ向から否定した点であった。その一年後に出版されたクートの著作が、従来の通説通りの評価であったことを想起されたい。しかしながら、カディシュによれば、『産業革命』とは、イギリスの歴史は漸進的に進歩し、一時的に悪化した労働者の状態も、そのことが、かれらがそれを克服する条件を生み出したとする、「楽観主義」に基づくテキストだった。

本節は、トインビー研究の観点からみて、実り豊かな成果が生まれた1980年代の代表的な三つの著作を取り上げ、それぞれの主張を要約したうえで、その意義を考察してきた。近年の代表的な人名辞典における「トインビー」の項目が、カディシュによって執筆されている事実



は、かれの『使徒 アーノルド』がトインビー研究の決定版とみなされている証左といえるだろう<sup>(70)</sup>。ただ、本稿の最後にみるように、本節で紹介したカディシュの『産業革命』研究の内容と主張は、管見する限り、あらたな通説の位置を占めているとは必ずしも、いいがたい。あるいは、言い方を変えれば、カディシュの研究によって、『産業革命』は「悲観的」にも「楽観的」にも読めると、今日では解釈されるようになったといえるのかもしれない。

### あたらしい「神話」か？——むすびにかえて——

これまでの節で、アーノルド・トインビーの死から 1980 年代までの、かれおよびかれの理論や思想に関する諸外国の研究動向を参照してきたので、最後に、1990 年代から今日にいたる研究を簡単にみて、トインビー研究の歩みをまとめてみたい。

1990 年代には、C. E. ヒルや S. M. デン・オッターの著作のなかに、トインビーへの簡単な言及があった<sup>(71)</sup>。しかしながら、それらのなかに、とくに目新しい主張がなされたわけではなかった。ところが興味深いことに、今世紀に入って、あらたな関心をもってトインビーを論じようとする複数のイギリスの研究者が登場している。

あらかじめ述べれば、これらの研究者はカディシュを中心とした研究で明らかにされた事実を前提としながらも、系譜的にみれば、ウィーナーの文化史的な研究を受け継ぐものといえるだろう。

注目すべきトインビー評価は、第二節で取り上げた、ステッドマン・ジョーンズのあらたな評価にみることができる。ステッドマン・ジョーンズは、2004 年の最新の著作で『産業革命』を、「近代イギリスの社会史の出発点」であったと高く評価した<sup>(72)</sup>。かつての自分自身とは異なる評価がなされたのは、かれが、1980 年代はじめに「言語論的転回」を示し、階級に基づく社会史的なアプローチを放棄した結果であったと考えられる<sup>(73)</sup>。

かれの最新の評価は、「物語」としての『産業革命』の生命力の強さに基づいていた。トインビーは「20 世紀のほとんどの時期を通じて近代イギリスの歴史の観念を支配し続けることになった、ひとつの物語の骨格を確立した」のである<sup>(74)</sup>。それは、労働者階級の生活水準に対する産業革命の影響をめぐる「楽観論」と「悲観論」の論争によっても根本的には、変更されることはなかった。

ステッドマン・ジョーンズによれば、トインビーの『産業革命』の特徴は、A. スミスの著作からではなく、T. カーライルの強力なイメージから、語り始めた点にあった。その結果、カーライル＝トインビー系譜の社会史は、反資本主義的エートスをまとって、とりわけ、その後のマルクス主義社会史家に大きな影響を与えたといえるのである。このように、ステッドマン・ジョーンズは、トインビーという人物から離れて、かれの『産業革命』というテキストを、現代イギリス社会の分析の出発点として評価するようになったといえよう。

知性史研究の D. ウィンチの研究もステッドマン・ジョーンズの視点と重なる点をもっていた。ウィンチによれば、イギリスでは、マルクスの『資本論』とエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』の英訳は、それぞれ、1886 年と 1892 年になってやっと現れた。したがって、イギリスの読者にとって、自国人によるはじめての産業革命に対する破局的な解釈は、非正統的な国教会系急進的自由主義者である、トインビーの『産業革命』によってもたらされた<sup>(75)</sup>。

このことによって、ウィンチによれば、トインビーは、「革命という言葉の大文字以上に、革命をもたらした」。なぜなら、『産業革命』によって語り始められた現象が、19 世紀後半から 20 世紀のイギリスの意識および歴史研究の中心的な方法となったからである。すなわち、『産業革命』のおかげで、イギリスの経済史家にとって、「産業革命」研究が、はじめて独立した研究テーマとなった。ここに、トインビーの「革命性」が求められるといえよう<sup>(76)</sup>。

以上、ステッドマン・ジョーンズおよびウィンチの研究を簡単に参照して、21 世紀におけるトインビー研究の到達点をみてきた。両者はともに、トインビーの『産業革命』が、現代に至るイギリス社会の分析の重要な出発点をなしたという高い評価を与えていた。ありきたりな言い方をすれば、『産業革命』こそはイギリス史研究の古典中の古典であり、それには、マルクス主義であろうとなかろうと、イギリス社会および経済の分析のための不可欠の視点と素材が埋まっているとするものであった。

このような主張に、わたしは、21 世紀のあたらしいトインビー「神話」をみることができるのではないかと述べてみたい。なぜなら、ステッドマン・ジョーンズもウィンチも、1980 年代のカディシュの主張を部分的に受けとめて、トインビーの『産業革命』は「楽観説」とも「悲観説」とも読めると述べ、同著がイギリス史研究の原点を提供していたと解釈していた点ではまったく同じ評価だったからである。もはや、21 世紀の研究者はトインビーという人物ではなく、かれの『産業革命』というテキストにしか関心がないかのようである。

しかしながら、本稿は、1880 年代はじめのイギリス社会において、トインビーの思想や理論の独自性や影響力がどれほどのものであったのかという視点をもつことは、依然として重要であると思う。その根拠を、トインビーの年金構想に対して、本稿が取り上げてきた従来の評価を批判的に吟味することで、最後に、示してみたい。

第一節でみたように、ミルナーの回想録の最後には、トインビーの年金構想が、専門家の議論より、6～8 年も先んじていたという評価が与えられていた。これは、トインビーの年金構想と比較的似ていた、チェンバレンの年金提案が 1892 年におこなわれていたことを指していると思われる<sup>(77)</sup>。そして第二節で言及したりヒターの評価は、トインビーの年金構想が、そのおよそ 30 年後の 1911 年の「国民保険法」の先駆けであったと主張していたように思われる。

しかしながら、19 世紀後半から 20 世紀初めのイギリスの年金に関するこれまでの研究からみると、うへの評価は受け入れられない。J. マクニコルらの研究によって、1878 年に、「国民

友愛組合計画」と称して、17～20歳の労働者がその間に、まとまった額を「国民クラブ」に拠出し、それを原資として、疾病・年金に当てるとする「国民保険」計画が、W. L. ブラックレーによって、すでに提案されていたことが明かであるからである<sup>(78)</sup>。

このように、ミルナーが主張していたこととは異なり、国家による年金を求める議論は、1870年代後半には始まっており、80年代には、イギリスにおいて社会政策上の大きな争点の一つを形成していた。すなわち、トインビーの年金構想に対するミルナーの評価は明かに過大で、「神話」のひとつを作ったと言わざるを得ないのである。

他方、1911年の「国民保険法」はたしかに、友愛組合を「認可組合」と認め、国家機構の一部とみなしていた。しかしながら、わたしは、まず、「自由党の諸改革」において1908年に成立した老齢年金法は、社会保険方式ではなく、無拠出であったという周知の事実<sup>(79)</sup>に、読者の注意を喚起したい。そして、トインビーの年金構想が、最晩年のかれの社会改革プランのなかに、やっと登場したのだという点にも留意したい。つまり、かれは、年金の主要な骨格さえ十分に詰めることができなかったのである。したがって、このような構想レベルの年金プランを、のちの「国民保険法」と比較すること自体、リヒターの評価にも無理があるように思われる。

最後に、1971年のステッドマン・ジョーンズの評価にも言及して本稿をむすんでみたい。さきに論じたように、かれはトインビーとバーネットの観点や方法に共通点があることを強調していた。しかしながら、第二節でも指摘したように、バーネットは1884年に、国家年金を構想した際、無拠出年金を提案していたのである<sup>(80)</sup>。社会保険方式と無拠出方式は、財源調達の方法という点では大きく対立するものであり、現に、その後の年金論争でも、この点が一大争点となった。よって、わたしは、バーネットと社会保険方式の年金を提唱したトインビーを同一視するステッドマン・ジョーンズの主張にも疑問を感じざるを得ない。カディシュの『使徒アーノルド』には、トインビーの老齢年金構想に対する言及はあったものの、事実の指摘に終わっていた点も付言しておこう<sup>(81)</sup>。

以上みたように、1880年代イギリスにおいて、トインビーがどのような見地で、どのような利害に基づいて、社会改革プランを構想したのかという点に絞っても、あたらしい研究の余地が十分にあると主張できる。あたらしいトインビー「神話」を語る前に、19世紀後半のイギリス社会にトインビーの理論や政策思想をどう位置付けるべきかという研究は依然として、求められているといえよう。そのためにも、もっとも重要なトインビー研究の成果が現れた1980年代、とりわけカディシュの研究をあらためて読み直して、そこでも十分に論じられてはいなかった論点や見解を深めてみるのが、今後の研究に求められていると指摘したい。

[注]

- (1) A. Toynbee, together with a short memoir by B. Jowett, *Lectures on the Industrial Revolution of the 18<sup>th</sup> Century in England*, London, 1884, 1887 ed. 邦訳書は複数あるが、本稿は次の文献を参照

- した。（塚谷晃弘・永田正臣訳）『英國産業革命史』邦光書房，1951年。ただし，この邦訳書は，トインビーの「産業革命」講義を訳しているに過ぎず，上記の原著に所収されている，他の独立した論文やジャウエットの回想などは訳されていない。なおトインビーの名は，同じ1884年に，ロンドンの貧困地域として知られるイーストエンドに，かれを記念して「トインビー・ホール」という名称の大学セツルメントが創設されたことによって，社会福祉の分野でもよく知られている。cf. A. Briggs and A. Macartney, *Toynbee Hall, The First Hundred Years*, London, 1984.（阿部志郎監訳）『トインビー・ホールの100年』全国社会福祉協議会，1987年。なお，以下で邦訳書がある文献を取り上げることもあるが，適宜，訳文を差し替えたことをあらかじめお断りしたい。
- (2) 住谷一彦・八木紀一郎編『歴史学派の世界』日本経済評論社，1998年。西沢保『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店，2007年。只腰親和・佐々木憲介編『イギリス経済学における方法論の展開』昭和堂，2010年。佐々木憲介『イギリス歴史学派と経済学方法論争』北海道大学出版会，2013年。西沢保・小峰敦編著『創設期の厚生経済学と福祉国家』ミネルヴァ書房，2013年。
  - (3) 系統的に論じることとはできないが，たとえば，1950年代から60年代にかけてよく読まれた，杉本栄一の『近代経済学の解明』には，ケンブリッジ学派に対する強い関心とは対照的に，歴史学派に対する関心はみられない。杉本栄一『近代経済学の解明』（上）（下）岩波文庫，1981年。なお，この底本は，1950年に理論社から公刊されているものである。
  - (4) 近年の理論動向に関しては，次の文献を参照されたい。馬場哲・小野塚知二編『西洋経済史学』東京大学出版会，2001年。長谷川貴彦『産業革命』山川出版社，2012年。
  - (5) 西沢，前掲書，70-71頁。西沢は，のちにみるミルナーの評価をそのまま引用している。
  - (6) A. Toynbee, "Progress and Poverty," *A Critical of Mr. Henry George*, London, 1883. pp.53-54.
  - (7) Beatrice Webb, *My Apprenticeship*, Cambridge, 1926, 1979. ed. pp.182-183.
  - (8) A. Toynbee, together with a short memoir by B. Jowett, *Lectures, op. cit.* pp.v-xxvii. トインビーは，1873年1月に，オックスフォードのペンブローク・カレッジに自費学生として入学した。そして同年11月に，かれはベイリオル・カレッジのブラックンベリー奨学金を得ようと試験を受けたが，不合格となった。しかし，その際の試験官がトインビーに好印象をもったことで，ベイリオルの責任者がかれに同カレッジ内の部屋を提供することを決めた。結果として，この申し出は，ペンブロークの校長の反対にあって実現しなかったが，そのときの試験官がジャウエットであった。A. Kadish, *Apostle Arnold, The life and Death of Arnold Toynbee 1852-1883*, Durham, 1986. pp.24-30.
  - (9) A. Toynbee, together with a short memoir by B. Jowett, *Lectures, op. cit.*, p.x.
  - (10) *Ibid*, p.xviii.
  - (11) F. C. Montague, *Arnold Toynbee*, Baltimore, 1889. pp.1-53.
  - (12) *Ibid*, p.13.
  - (13) *Ibid*, p.33.
  - (14) *Ibid*, p.38.
  - (15) *Ibid*, p.38.
  - (16) のちにみる，1980年代のトインビー研究では，トインビーの死の後に語られたかれに関する言説は，「絶賛一色であった」とか「大衆的な神話によってロマン化された」と客観的に語られていた。G. M. Koot, *English historical economics, 1870-1926*, Cambridge, 1987. p.85. A. Kadish, *op. cit.*, p.232. また，「おそらく早死のおかげで，トインビーは神話上の人物になった」と評価したミーチャムの研究も参照されたい。S. Meacham, *Toynbee Hall and Social Reform 1880-1914*, Michigan, 1987. p.18
  - (17) A. Toynbee, together with a Reminiscence by Lord Milner, *Lectures on the Industrial Revolution of the 18<sup>th</sup> Century in England*, London, 1884, New ed. 1894, 4<sup>th</sup> impression, 1916. pp.v-xxx.
  - (18) *Ibid*, pp.xi-xii.

- (19) *Ibid.*, p.xvi.
- (20) *Ibid.*, p.xii.
- (21) *Ibid.*, p.xxi.
- (22) *Ibid.*, p.xxiii.
- (23) *Ibid.*, pp.xxiv-xxv.
- (24) *Ibid.*, p.xxviii.
- (25) *Ibid.*, p.xxviii.
- (26) *Ibid.*, p.xxix.
- (27) L. L. F. R. Price with a preface by A. Marshall, *Industrial Peace*, London, 1887. p.viii. なお、刊行年は明らかではないが、トインビーの姉のガートルードが編集した次の書簡集も、所収されている書簡のなかでは、1909 年 4 月のものがもっとも新しい書簡であるので、「神話」の時代に含まれる文献であるとみなせる。G. Toynbee ed., *Reminiscences and Letters of Joseph and Arnold Toynbee*, London, n.d. pp.190-191.
- (28) T. W. Hutchison, *A Review of Economic Doctrines 1870-1929*, Oxford, 1953. (長守善・山田雄三・武藤光朗訳)『近代経済学説史』上・下巻、東洋経済新報社、1957 年。do, *On revolutions and Progress in economic knowledge*, New York, 1978. (早坂忠訳)『経済学の革命と進歩』春秋社、1987 年。
- (29) Hutchison, *A Review of Economic Doctrines*, *op. cit.*, p.11. 邦訳、上巻、15 頁。
- (30) *Ibid.*, p.12. 邦訳書、上巻、15 頁。A. Toynbee, together with a short memoir by B. Jowett, *Lectures*, *op. cit.*, p.87. 前掲、邦訳書、94 頁。
- (31) Hutchison, *op. cit.*, p.12. 邦訳書、上巻、15 頁。なお、ハチスンが引用した個所を、『産業革命』のなかから発見することができなかったのも、トインビーの論文「賃金と自然法」(1880 年 1 月および 1882 年 2 月の講演)のなかの次の一節を掲げることにした。「わたしは、富の分配の問題が現代の最大の問題であると述べることに、躊躇はない」と。A. Toynbee, “Wages and Natural Law” in do, together with a short memoir by B. Jowett, *Lectures*, *op. cit.*, p.156.
- (32) Hutchison, *op. cit.*, p.21. 邦訳書、上巻、26 頁。
- (33) M. Richter, *The Politics of Conscience*, T. H. Green and his age, London, 1964.
- (34) *Ibid.*, p.287.
- (35) *Ibid.*, p.288.
- (36) *Ibid.*, pp.338-339.
- (37) 世紀転換期のイギリス新自由主義研究に関しては、枚挙に暇がないほど文献があるので、リヒターの研究を受け止めたと思われる、次のふたつの先駆的な研究だけを挙げておきたい。Cf. M. Freedman, *The New Liberalism, An Ideology of Social Reform*, Oxford, 1978. A. Vincent and R. Plant, *Philosophy, Politics and Citizenship, The Life and Thought of the British Idealists*, Oxford, 1984.
- (38) 直接、トインビーへの言及はないが、マルクス主義教育史家である B. サイモンが、セツルメントの考えを、あたらしい「封建的見地」とであるとみなしたのも、この時期であった。B. Simon, *Education and the Labour movement 1870-1920*, London, 1965. p.78. (成田克矢訳)『イギリス教育史 II』亜紀書房、1980 年、76-77 頁。
- (39) G. S. Jones, *Outcast London, A Study in the Relationship between classes in Victorian Society*, Oxford, 1971, 1976. ed.
- (40) *Ibid.*, p.301
- (41) *Ibid.*, p.302.
- (42) *Ibid.*, p.302.

- (43) *Ibid*, p.302. トインビーの提案はつぎの論文にみられる。A. Toynbee, “Are Radicals Socialists?” in do, together with a short memoir by B. Jowett, *Lectures, op. cit.*, p.219.
- (44) G. S. Jones, *op. cit.*, p.302.
- (45) A. Kadish, *op. cit.*
- (46) M. J. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850-1980*, Cambridge, 1981, 2004 ed. (原剛訳)『英国産業精神の衰退』勁草書房, 1984 年。G. M. Koot, *op. cit.*
- (47) Wiener, *op. cit.* pp.82-88. 邦訳書, 139-147 頁。
- (48) Koot, *op. cit.* p.4.
- (49) *Ibid*, p.86.
- (50) *Ibid*, p.88.
- (51) *Ibid*, p.89.
- (52) *Ibid*, p.89.
- (53) A. Kadish, *The Oxford economists in the late nineteenth century*, Oxford, 1982. do, *Historians, Economists, and Economic History*, London, 1989.
- (54) C. M. Toynbee, “Prefactory Note”, in A. Toynbee, together with a short memoir by B. Jowett, *Lectures, op. cit.* pp.xxix-xxxi.
- (55) この点に関しては、依然として、従来の評価を踏襲している長谷川, 前掲書, 10-12 頁, を参照されたい。
- (56) Kadish, *Apostle Arnpld, op. cit.* p.126.
- (57) A. Toynbee, together with a short memoir by B. Jowett, *Lectures, op. cit.* pp.93-94, 105. 前掲, 邦訳書, 104, 121 頁。
- (58) Kadish, *Apostle Arnpld, op. cit.* p.127.
- (59) *Ibid*, p.128.
- (60) *Ibid*, p.128.
- (61) *Ibid*, p.105.
- (62) *Ibid*, p.105.
- (63) *Ibid*, p.105.
- (64) *Ibid*, pp.242-243.
- (65) *Ibid*, p.243.
- (66) *Ibid*, p.244.
- (67) *Ibid*, p.245.
- (68) *Ibid*, p.216.
- (69) B. Semmel, *Imperialism and Social Reform*, London, 1960, p.178. (野口建彦・野口照子訳)『社会帝国主義史』みすず書房, 1982 年, xliii 頁。
- (70) A. Kadish, “Toynbee Arnold” *Oxford Dictionary of National Biography*, 2004. pp.176-178.
- (71) C. E. Hill, *Understanding the Fabian Essays in Socialism (1889)*, New York, 1996. pp.152-153. S. M. Den Otter, *British Idealism and Social Explanation, A Study in Late Victorian Thought*, Oxford, 1996. pp.68-73. 翻訳論文ではあるが, カディシュの研究を踏まえて「トインビーの著作には議論や方法の一貫性はほとんど認められない」とするトライブの論稿も, 参照されたい。(小林純訳)キース・トライブ「ポリティカル・エコノミーの歴史主義化」住谷・八木編, 前掲書, 所収, 179 頁。
- (72) G. S. Jones, *An End to Poverty? A Historical Debate*, London, 2004. p.227.
- (73) ステッドマン・ジョーンズの方法の変化については、次の邦訳書の長谷川による「訳者解題」を参照されたい。 *ibid*, *Languages of Class*, Cambridge, 1983. (長谷川貴彦訳)『階級という政治』刀水書房, 2010 年, 267-275 頁。なお、ステッドマン・ジョーンズのこの邦訳書への「日本語版への序



文」(2009 年 4 月)は、*An End to Poverty?*<sup>2</sup>の内容と重なる部分が多いので、ここで訳文を一部、借りた。前掲邦訳書、Iii-xiii 頁。

- (74) G. S. Jones, *An End to Poverty?*<sup>2</sup> *op. cit.*, p.229.
- (75) D. Winch, *Wealth and Life, Essays on the Intellectual History of Political Economy in Britain, 1848-1914*, Cambridge, 2009, p.9.
- (76) *Ibid.*, p.9. なお、ウィンチの次の最新のペーパーも参照されたい。D. Winch, “Arnold Toynbee’s Industrial Revolution” Donald Winch archive by the Institute of Intellectual History, University of St Andrews, 2013, pp.1-20.
- (77) J. Chamberlain, “Old-Age Pensions” *National Review*, vol.18, no.108, Feb. 1892, pp.721-739. in J. Macnicol ed. *Paying for the Old: Old Age and Social Welfare Provision*, Vol.1. Bristol, 2000.
- (78) J. Macnicol, *The Politics of Retirement in Britain, 1878-1948*, Cambridge, 1998, pp.60-65. W. L. Blackley, “National Insurance” *Nineteenth Century*, vol.4, No.21, November, 1878. pp.834-857. in Macnicol. ed. *op. cit.*
- (79) 世紀転換期の年金における無拠出と保険原則の議論に関しては、少し古い<sup>3</sup>、以下の文献は有益である。P. Thane, “Non-Contributory Versus Insurance Pensions 1878-1908” in *ibid.*, ed, *The Origins of British Social Policy*, London, 1978, pp.84-106.
- (80) S. A. Barnett, “Practicable Socialism” *Nineteenth Century*, vol.13, No.74, April, 1883. p.557.
- (81) Kadish, *Apostle Armord*, *op. cit.*, p.209.

(ふじい とおる 公共政策学科)

2015 年 4 月 23 日受理

